

オピニオン

「出逢い直し」仕掛けよう

NPO法人地域の絆代表理事 中島康晴さん



地域を変える方法

安心して暮らすには、地域を変える必要がある。福山市のNPO法人地域の絆の代表理事、中島康晴さん(44)は今年刊行した著書で、地域発の「社会変革」を訴える。高齢者施設を運営しながら、ケアを通じたまちづくりに取り組む中島さんに地域を変える方法を聞いた。

(論説委員・平井敦子、写真・河合佑樹)

「著書『地域包括ケアから社会変革への道程』(批評社)から、今の社会への違和感が強く伝わってきます。

NPOを設立して12年、広島県内の九つの拠点で小規模多機能ホームや認知症グループホー

ムを運営してきましたが、格差が広がり、人のつながりが希薄になり、社会から排除される人は増えていると感じています。望む場所で暮らし続ける自由があるのかどうかも疑問です。

「具体的に思い浮かぶ事例がありますか。」

「例えば、1人暮らしの高齢者が認知症になり、ごみ出しの日を間違ってしまう。外出して行方不明になり、近所の人も捜索に駆り出される。すると地域から「施設に入れてくれ」との声が出る。家族も近所に迷惑を掛けるのがしのびなく「施設に

入ってくれ」となる。

「住み慣れた家で暮らしたくてもかなわないのですね。」

「自己決定の権利を侵害しておいて、個人の尊厳が守られた、安心な暮らしが実現できるでしょうか。尊厳を守るには、地域の側を変える必要がある。そのために『出逢い直し』を仕掛けるんです。」

「どういうことでしょうか。」

「排除の理由には、認知症の人と接したことがないという『出逢いの不在』や、認知症の人に困ったことをされたという『出逢いの失敗』があります。そのために関わりを避ける、排除し、さらに関わりを避ける。悪循環です。断ち切るには、認知症の人と出逢い直す必要があります。偶然「会う」のではなく、意識的に「逢う」のです。

「どんな実践をしていますか。」

「1人暮らしの認知症の人をサポートする場合、うちの職員が

近所を訪ねてあいさつします。暮らしに困難を抱える人の存在を地域の人に知らせ、同時に私たちが支援することも伝えま

す。すると、不安より安心を感じてもらえることが多い。

その後、近所の人に認知症の人の側を変える必要がある。そのために『出逢い直し』を仕掛ける機会をつくります。

「体験、ですか。」

「職員が付き添って散歩している様子を、日々、近所の人に見てもらおう。本人が穏やかな表情であいさつすると、近所の人を受け止め方も違ってきます。これが『出逢い直し』です。すると、認知症の人が1人で外出するのを見掛けて、うちの事業所に連絡してくれる人も出てくる。緩やかな見守りです。

「良い形でその人を知ってもらうことにより、理解や支え合いを促せるのですね。」

「机の上で正しい知識を学ぶのではなく、その人と関わる体験の中で知ってもらおうというのが、私たちの目指していることです。」

「衆院選ではいまだに経済成長が豊かさの唯一の指標として語られていますが、違うんじゃないか。社会保障費が成長の足を引っ張るかなのような議論も、本末転倒です。尊厳ある暮らしに何が必要なのか。そこから議論を始めるべきです。」



なかしま・やすはる 福山市生まれ。京都で過ごした高校時代にいじめに遭い、排除の痛みを知ったという。99年、花園大社会福祉学部を卒業後、大阪府東大阪市や福山市の福祉施設で勤務。個人の尊厳が守られたまちづくりを目指して06年2月、NPO法人地域の絆を設立し、現職。広島県社会福祉士会会長を経て、現在は日本社会福祉士会副会長。